巻頭言

切手蒐集家の哀しみ、あるいは「早く家に帰っておいで、子供たち！」

沼野 充義

どういう意味かはっきり分からず、いつかきちんと調べようと思っているのにいつも調べそびれたままになっている。でも、やはり気になってときどき思い出しては、やはり不思議だなあ、と思う。私にはそんな言葉がいくつかある。その一つは、「君と世界の戦いでは、世界に支援せよ」*という——いささか妙な日本語に訳された（誤訳ではないのだろうか？）——カフカの言葉だ。

自分と世界の戦いという図式は、いつも滑稽なほどひとりぼっちだったプラハのユダヤ人に似つかわしい。しかし、考えてみれば、世界に向き合うとき、人はいつでもひとりぼっちじゃないか。文学についても同じことが言える。「世界文学」などとお手軽にいう手合いが最近多いようだけれども（何を隠そう、他ならぬ私もその一人だ）、世界文学の気が遠くなるくらいの膨大さを本当に考えたことがあるのだろうか。一国の文学を極めることすら一生かかってもできないのに、世界文学全体を相手にして一人の人間にいったい何ができるというのか。結局のところ、本を読むのは自分一人であって、共同で沢山の本を手分けして読んだとしても、そんなものは読書とは言えないだろう。どんなに親しい友人でも、恋人でも、君の代わりに本を読んではくれない。

確かに、世界文学の巨大な量と広がりは気が遠くなるほどのものだ。しかもそれは膨張する宇宙のように、とめどなく増えていく。いまこの瞬間にも、世界中の何百、何千という言語で、数え切れないほどの本が書かれていて、その大部分は読む必要もないクズみたいなものだとしても、読むべき価値ある作品も 1 パーセントくらいは含まれているかもしれない。しかし、たとえ 1 パーセントであっても、途方もない量だろう。「肉体は悲しい、私はすべての本を読んでしまった」と有名なフランスの詩人が言っているらしいが、どう

---

* 原文は"Im Kampf zwischen dir und der Welt sekundiere der Welt."　＜～に支援せよ＞における助詞「に」の使い方は明らかにおかしいが、ドイツ語の 3 格に引きずられたものだろう。私の知る限り、日本語を話すドイツ人やロシア人は、時々「誰それに助ける」といった言い間違いをおかすが、これも同様の理由による。ところで動詞 sekundieren はボクシングで「セコンド」をつとめる、また決闘では介添人をつとめる、という意味になる。カフカがボクシングを念頭に置いていたならば、「君と世界とのボクシングでは、世界のセコンドをつとめよ」、もしも決闘のイメージならば、「君と世界の決闘では、世界の介添人をつとめよ」と訳すべきだということになりそうだが……。

してすべての本が読めるのだろうか、と私は昔から不思議でならなかった。

世界には読まなければならない名作がすでにどうしようもないほど沢山あるが、その中には容易に通読できないものも少なくない。『源氏物語』も、『フィネガンズ・ウェイク』も、まともに通読したとは胸を張って言えない我が身である（ちなみに、大学にいると、こういう作品を読んだことがあるか、と互いに聞くのはなんだかはばかられるようなところがある。みんな大人だから、互いに気まずい思いをさせてはいけないと配慮して、そういう野蛮な質問は控えるのだろう。しかし、ときどき現代文芸論の学生の中にはなかなかのつわものがいて、私に『失われた時を求めて』を最後まで読んだことがあるか、と正面から尋ねてきたりする）。

いや、読むべきものをじつはちゃんと読んでいない、といういまさら立場上告白しにくい悩みを抱えているのは、私一人ではあるまい。最近はさすがにあまり流行らなくなったが、日本ではちょっと前まで、「世界文学全集」「日本文学全集」といった類の膨大なシリーズが頻繁に出版されていた。昔はそういった全集を残らず読破しようとする強迫観念に駆られる読者も少なくなかったはずだが（そういういい意味での「教養主義」が健在だったのだ）、実際には世界文学全集をどれか一つでも最初の巻から最後の巻まで一行ももらさず読み通したという奇特な読者はめったにいないのではないだろうか。

わが家にも、父が読みもしないのに家の飾りのようなものとして予約購読していた河出書房版の世界文学全集と角川書店版の日本文学全集が毎月一冊ずつ届けられていたので、私もまだ小さいころ（たぶん小学校高学年か中学生くらいのときだったか）、「すべて」を踏破したいという知的野心に燃えて、書棚に並ぶ「ドストエフスキー」とか「森鷗外」といった巻を手にとっては見たのだが、細かい活字でしかも三段組みの頁を読み進むスピードは驚くほど遅く、三頁も読まないうちに眠くなってしまったものだ。

考えてみれば、世界文学の「全集」とは奇妙な言い方ではないか。漱石全集やバルザック全集といった作家の個人全集ならともかく、世界文学はあまりにも膨大なので、その「すべて」を集めた全集など、あり得ないからだ。しかし、「全集」という言葉にはなんだか安心感があった。ここには読むべきものの「すべて」がある、そういう揺るぎない価値観の体系があるのだから、たとえ読み切ることができなくとも、必要となればまたここにいつでも戻ってくればいいのだ、と感じさせてくれたからだ。それは、いつでも帰って来られる家のようなものだった。

しかし、どうしてそんなに「すべて」にこだわるのだろうか。すべてを集めてしまいたいという野心を抱くのはどうも男に多いようだが（世界中の金と権力を、女を、そして領土を！　自分のささやかな土地をきちんと耕すことも、一人の女を満足させることも上手にできないというのに）、これは一種の蒐集家的欲望ではないだろうか。そういえば、私もまたご多分に漏れず、子供の頃から切手を始めとしていろいろなものを集めるのが好きだった。そして、蒐集家というものは、必ず「すべて」を極めようとする。ところが、世界中には数え切れない数の国があって、それぞれの国がこれまた数え切れないほどの切手

を出している。世界の小国の中には、外貨獲得をねらって、何かにつけとてもきれいな記念切手のセットを出すところも多い。そんな切手が毎年毎年出ていたら、そのうち世界全体で過去から現在までどれほど沢山の切手が出ているのか、誰にもわからなくなり、その「すべて」を集めるなんてこと自体、不可能になってしまう。なんて哀しいことだろうか。

世界文学もそれと同じで、どんどん新しい作品が書かれ、世界文学の共和国に登録され続けると、作品の総体を示すリストは果てしなく膨大なものになっていく。しかも、切手と違って、文学には言語の問題がある。自分の知らない外国語で書かれた作品は、それがどんなにいいものであっても読めないわけだが、いま世界中で文学執筆のために使われている言語の数がいったいいくつあるのか、数百なのか、あるいは千を超えるのか、正確にはこれまた誰にもわからない。いずれにせよ一人の人間が読むことのできる言語数は一つか二つ、せいぜい三つか四つくらいで、どんな言語の天才であっても、文学作品を原文で読みこなせる言語の数が二桁になることはめったにない。世界文学の言語の総体に比べたら、一人一人の言語能力なんて、取るにたらないほど小さなものだ。

いまや私たちは現代の文化理論の洗礼を受け、時代を超えて変わらない価値観の体系などそもそもありえない、と考えるのが常識になってしまった。昔のように「これだけ読めば全部わかる」「読むべきものはここにすべて収められている」といった安心感を与えてくれる世界文学全集なんてものはないのだという時代に突入しつつある。今風に言えば、世界文学全集にどんな作家や作品を入れるかは「カノン」（つまり公的に価値を認められた作品群）の問題であり、カノンはそれぞれの時代の価値観やイデオロギーを反映して変わっていくものだ、ということになる。子供たちが遊び疲れ、放蕩のあげくの果てに、いつでも帰っていける家のようなもの――それがカノンであるとするならば、私たちはもはや家を失ってしまった孤児なのかもしれない。

そうだとしたら、新しい家はどのようにして作れるのだろうか。いま、まったく新しい「世界文学全集」をたとえば今福龍太・柴田元幸・管啓次郎・西成彦・沼野充義・野崎歓・野谷文昭・藤井省三・細川周平の共同編集によってつくることは可能なのだろうか（このように架空の編集陣のリストを書きだしてみて、ふと気付く――男ばかりではないか！世界文学全集作りは結局のところ、帝国主義的な領土ぶんどり合戦であって、男の欲望の争う場なのだろうか）。私自身、自分の余生よりも、子供たちの未来のほうが大事だと心から思えるような年齢にさしかかり、「地図も道もない世界を放浪することはやめて、子供たちよ、早く家に帰っておいで！」と言ってみたいのだけれども、肝心のその家がなくなってしまっているとしたら（アウシュヴィッツ以後、とっくにそうであったのかもしれないのだ）、そして、そもそも家を壊してしまったのが親である我々だとしたら、どうしたらいいのだろうか。過去の中に家を探すのは、もうやめたほうがいいのかもしれない。家は未踏の沃野の中に作るもの。世界文学者の故郷は未来にしかないのだから。